

## 内部評価① 安藤 輝次氏

## 平成28年度 AP評価報告書についての内部評価

内部評価委員  
文学部教授 安藤 輝次

本年度（平成28年度）は、平成31年度まで続く「実施・評価・検証・改善フェーズ」の第1年目で、本報告書には多彩な活動が記録されています。積極的かつ継続的な活動には敬意を表するところです。

一方で、本報告書では、実践や訪問した記録の多いことが目につきます。報告書としては、平成28年度はここまで出来て（C）、これは出来ていないので、平成29年度はこれを課題としたい（A）という内容構成が必要ではないか、という感覚を持ちました。毎回の会議でそうしたことはチェックされているはずですので、今後はその内容を少し紹介されてはいかがでしょうか。

次に、活動内容についてみていきます。

まず、テーマIに関しては、9回にも渡る交渉学ワークショップやリーダーシップ育成研修が行われ、着実に「考動人」の育成プログラムが進んでいることがうかがわれます。こうした活発な実質的な活動実績があることに比べて、本報告書では若干の記述の曖昧さが散見されます。例えば、「ピア・サポートのためのクリティカルシンキング」の授業実践が44頁から51頁までに掲載されていますが、これと61頁の「クリティカルシンキング」のクラスループリックとの関連性が十分には描かれていません。こうした授業紹介については、何回生対象の何単位の授業で何名が受講しているかという基本情報や、授業実践の節目に小見出しを付ける等の工夫がほしいところです。また、受講者全体としての類似の感想を取りまとめて量的に示したり、特定の受講生の学びの歩みを感じて迎える質的な事例もあってよいと思われます。今後、活動内容の豊かさが報告書にきちんと反映されることを望みます。

テーマIIについては、初年次教育に関するメタループリックの作成、クラスループリックの普及を始めとした計画に対して、着実に実践が進められているように思われます。しかしながら、ここでも、同様の課題があります。例えば、本年度は「コモンループリック活用を促進するとともに、指標およびシステムを検証・改善する」(3頁)ことの第1年目ではありますが、ループリックの使い方ガイド(60頁)を使った授業の実践の歩みと絡めた結果の記載が次年度にはあればいいと思われました。「学修行動調査・到達度調査」についても、入学時調査を「やった」ことは分かりますが、その結果どうだったのか、ということの一部でも示していただければ、それぞれの調査実施とその結果が明確になり、PDCAサイクルを意識した望ましい報告書になったかと思えます。卒業調査についても同様のことが言えます。次年度の各種調査ではこのような点も改善されることを期待します。

今日の大学教育においては、“深い学び”をどう実現するのかということが喫緊の課題です。本報告書でも79頁にディープアクティブラーニングが挙げられ、アクティブラーニングについては国内的にはかなり重要な情報発信機関になってきていると認めています。本APの取り組みに関わっておられる専任の先生方のご努力を高く評価するものですが、今後はさらに深い議論をしていく必要があると考えられます。例えば香港大学のCarless,D.などの大学教育専門家等のところに赴いたり招聘したりして、大いに国際的にも発言力のあるステータスを確保する必要もあるでしょう。ループリックに関しても、大学授業でループリックを普及させるためには、ICT活用が不可欠だと考えられます。

これらを視野に入れながら、本取組を継続・発展させていければ、国内外でのパイオニア的な取り組みになるのではないかと期待しております。

## 内部評価② 中村 隆宏氏

大学教育再生加速プログラム  
「21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>の育成」  
2017（平成28）年度 内部評価報告

内部評価委員  
社会安全学部教授 中村 隆宏

年次計画によれば、2016（平成28）年度は、今後の「実施・評価・検証・改善」の各フェーズへ円滑に至るための体制整備を行う時期として位置づけられている。テーマI「アクティブ・ラーニング」およびテーマII「学修成果の可視化」に共通する部分として、「学内APの募集・支援・調査を通じた事例の収集」、「アクティブ・ラーニングやループリック等に関する国内外調査の実施と情報発信」のほか、シンポジウムの開催等が計画されていた。また、テーマI関連として、「交渉学ワークショップの企画・開催」、「交渉学科目およびクリティカルシンキング科目の新設・増設」、「アクティブ・ラーニング型科目の授業実践例に関する報告会・研究会の開催」「クラスループリックの試行的運用」「学生スタッフ育成プログラムの実施ならびに効果測定指標の構築」等々が計画されていた。さらに、テーマII関連として、「学修コンシェルジュ研修プログラムの再考と実施」「直接評価と間接評価のすり合わせと学びのプロセスの検討」「初年次教育に関するメタループリックの作成」「クラスループリックの普及」等々、計画内容は極めて多岐にわたるものである。

こうした計画に沿って、2016（平成28）年度には多様な活動が展開された。「Lifelong Active Learnerの育成」に関連しては、交渉学ワークショップを含む延べ9回の「考動力およびリーダーシップ育成研修」が開催され、フォーラム・研修を含む「アクティブ・ラーニング関連FD/SD」の開催は延べ3回となった。他にも、交渉学・クリティカルシンキングの要素を取り入れた授業の実践や、他大学との交流を通じて、情報の収集と発信、ならびに実践と普及が図られたものと評価できる。「行動力の成果指標開発と検証」に関しては、報告会・セミナー・談話会を含む延べ3回にわたる成果指標関連FD/SDが開催されたほか、学修コンシェルジュ研修プログラムの実施、学修行動調査・到達度調査の実施、ループリックの普及活動等が行われた。他大学や他機関を対象とした調査・報告は、国内に留まらず海外へも展開されており、極めて活発に活動が行われていると評価する。さらにこれらの活動の中には、2つのテーマに跨って展開されているものもあることから、枠にとらわれない相乗的効果も期待される。

こうした体制整備の段階を経て、今後の「実施・評価・検証・改善」の各フェーズへと向かうに当たっては、以下の点について更なる検討が必要であろう。一つには、交渉学やアクティブ・ラーニング、ループリックといった様々なツールについて、実際に授業での実践を図り、本学における一つのスタンダードの構築を目指すことは極めて有意義であるが、本学における教育の守備範囲は、専門性が多岐にわたることもあり、極めて広範囲にわたる。そのため、本プログラムが目指す「考動人の育成」についても、その理念・概念を共有し実践へと展開することは、必ずしも容易ではない。各教員の個性や授業運営の特色を生かしつつ、限定的・固定的な枠にとらわれない、柔軟かつ広範囲にわたる展開が求められる。同様に、現在の活動、特に学生スタッフが中心となって行われる活動は、地理的な制約もあって、主に千里山キャンパスとなりがちである。今後は、他キャンパスへの展開を積極的に行うための方策についても、検討が必要であろう。次に、2021年に控えた大学入試改革によって、本学の教育体制・内容が大きな影響を受けることは避けられない。こうした変化を見据え、一旦構築された体制に縛られることなく、柔軟な運用も視野に入れた体制整備を継続する必要がある。

## 外部評価① 一色 正彦氏

## 大学教育再生加速プログラム 「21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>の育成」 平成28年度 外部評価報告

外部評価委員

金沢工業大学大学院 イノベーションマネジメント研究科  
客員教授 一色 正彦

平成31年度までを実施期間とする「実施・評価・検証・改善フェーズ」の1年目に計画されている各テーマについて、平成28年度成果報告書に基づき、以下に評価する。

テーマⅠ：アクティブ・ラーニングについて、交渉学ワークショップ4回を含む、考動力及びリーダーシップ育成研修、アクティブ・ラーニング関連FD/SDが、昨年度に引き続き積極的に開催されている。特に、交渉学ワークショップは、学生が主体的に企画・運営していること、学内のみに留まらず、他校の大学生との交流（8月6日、東京センター開催、追手門学院大学、東京富士大学、神戸親和女子大学の学生等）、中学生との交流（12月9日、大阪学芸中等教育学校の生徒）が行なわれていること。更に、社会人との交流（8月5日、日本IBM社員との合同研修会等）を通じて、幅広い活動が実施されていることが評価できる。

テーマⅡ：学修成果の可視化について、学修コンシェルジュ研修プログラム、クラスループの普及、学修行動調査・到達度調査の実施等を通じて、多様な活動が行なわれている。特に、共通教養科目のスタディスキルゼミ科目において、交渉学入門とクリティカル・シンキングの授業が計画通り実施されており、更に、クラスループについて、開発実施クラスが拡大し、前年度と比較し件数が増加していることが評価できる。

以上から、平成28年度について、今後の「実施・評価・検証・改善フェーズ」に円滑に至るための体制整備を行なう取組みとして、実施計画に従い、計画通りに推進できていると評価できる。

昨年度の外部評価における指摘事項に対する検証と共に、次年度以降の推進に関連して、検討を要する事項を指摘する。学生の学びの検証について、入学時から卒業に至る学修行動調査・到達度調査(入学時・パネル調査・卒業後)への取組みは、学修前後の成長や変化を可視化する取組みであり、高く評価できる。今後は、入学時と卒業後の比較分析を行なうと共に、分析結果を学生と共有して議論し、今後の活動に活かす取組みが必要であると思われる。更に、卒業後の社会人と学生が交流する機会を作り、学生の学びの意欲や到達目標を刺激する取組みを検討して欲しい。

報告書における実績報告は、実施・訪問の記録として有益だが、今後は、共通の指標により達成内容と課題を明示して評価する取組みが必要であると思われる。また、クリティカル・シンキングと交渉学入門のクラスループ試案の試行と改良により、実施している複数の授業レベルの評価の取組みを進めると共に、ワークショップや各授業で用いた教材をループに基き評価・検証のうえ、共有できるナレッジを整理し、継続して学ぶ学生が活用できる取組みが必要であると思われる。

## 外部評価② 沖 裕貴氏

## 平成28年度 AP 評価報告書についての外部評価報告

外部評価委員

立命館大学教育開発推進機構・教授  
沖 裕貴

最初に関西大学APプロジェクト運営委員会が今年度も精力的に活動を推進され、多大なる成果を挙げられましたことに心より敬意を表します。

本年度は取組3年目ということで、いよいよ「実施・評価・検証・改善」フェーズの最初の年度となりました。今後のテーマの一つ目は交渉学とクリティカルシンキング科目についてコモンループリックを用いて検証、改善すること、二つ目はそのコモンループリックの指標・システムの検証、改善をはじめ、学修行動・到達度調査の実施や各種研修会、学習会の開催となります。これらの事業は本APの取組の中でももっとも注目度が高く、また大きな困難と難易度を持ったものであると言えるでしょう。

特に本APで開講した交渉学やクリティカルシンキング科目の検証と、その検証の土台となるコモンループリックの検証については、本APの成否を担うもっとも重要なステージになりますので、学内の協働体制を構築しながら慎重に事業を推進するとともに、学術的にも内外の審査、評価に耐えうる高い水準を保つ必要があります。

そこで報告書を拝読し、気付いた点を述べさせていただきます。

今年度のテーマは上記の2点であることが記されています(p.3)。それを実行する計画として重要なものは、テーマⅠ関連では「⑨交渉学・クリティカルシンキングに関する科目並びにその要素を取り入れた授業においてクラスループリックを試行的に運用する」が相当し、テーマⅡ関連では「⑬初年次教育に関する学士課程ごとのメタループリックを作成する」と「⑮卒業生調査を検討する」、「⑯協力学部におけるパネル調査の2年次、3年次を実施する」が相当するでしょう (p.8,9)。また、具体的な取組内容ではテーマⅡ関連で「⑫前年度に引き続き、GPAなどの直接評価と学生調査等の間接評価をすり合わせ、試行学部において双方の観点から学びのプロセスを検討する」が該当します (p.10)。その成果は、テーマⅡ関連で「⑫データの単純集計ではなく、学生の多様な学びを、できるだけ多様なデータ、学術の知見を用いた適切な分析で明らかにすることにより、より教員、学生ともに学修の指針となる結果が導かれる可能性が高い」と「⑬専門教育と共通教養教育の双方において初年次教育が展開されている本学において、学部協働型のループリック開発は、学士課程教育の質保証の中で重要な位置を占めている」が合致するようです (p.13)。

しかし、残念ながら「考動力の成果指標開発と検証」(pp.57-68)においても、本文の詳細な活動報告においても、この間の目的であった「科目の検証」や「コモンループリックの検証」の具体的な検証内容や改善点がほとんど書かれていません。もちろん今年度は実施・評価・検証・改善フェーズの最初の年度ですから、当初の計画通り進まなかった可能性も高く、また、ループリックをはじめ、開発、導入の段階であったことは十分に理解できますが、少なくとも1、2年目の実践を踏まえた検証内容や改善点はある程度見えているはずですし、成果にも書かれているように「学術の知見」を重視した開発の過程はあったことと思います。このあたりの記述がほとんどなく、各取組の報告に終わっているところが今回の報告書のもっとも残念な点であったように思います。

ただ、文部科学省の期待も高く、補助期間の1年追加が通知されたとのことですので、あと3年間を費やして評価・検証・改善フェーズの充実が努められることと思います。その成果こそが本取組の本命であり、高等教育に関係する多くの人の待ち望んでいるものとなりますので、引き続き関係者の皆様のご努力と次年度のさらなる発展を期待しています。



## 外部評価③ 川嶋 太津夫氏

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」採択  
 関西大学「21世紀を生き抜く考動人、＜Lifelong Active Learner＞の育成」  
 平成28年度 「外部評価」報告書

外部評価委員  
 大阪大学高等教育・入試研究開発センター  
 川嶋 太津夫

28年度は31年度までの「実施・評価・検証・改善」の初年度と位置づけられている。取り組み予定は以下のとおり。

テーマⅠ：●交渉学・クリティカルシンキング科目、交渉学WSについて、コモンをループリック用いて検証し、改善する。

テーマⅡ：●コモンループリック活用を促進するとともに、指標及びシステムを検証・改善する。●学修行動・到達度調査を継続実施する。●学修成果可視化の成果を学内に広く周知し、普及拡大を測る。

FD/SD事業運営：●先進事例を調査しその内容に関する交渉学・キャリア教育学習会等を実施する。●学生スタッフ育成プログラムおよび学修コンシェルジュ研修プログラムを検証し、改善する。

点検・評価：内部評価委員会・外部評価委員会を開催する。

成果等の普及：●シンポジウムを開催し、成果報告書を作成する。

これらの計画に従って、それぞれのテーマごとに多種、多様な「活動」が実施され、各活動の実施報告が提出されている。その点は賞賛に値するが、内部評価委員がいみじくも指摘しているように、各取り組みの報告は、どちらかというnarrativeで、受講者や参加者数などの基本情報が欠けていることに加えて、analyticalな報告となっていないのは残念である。今後は、各取組に共通する報告様式を作成するなど、内容のみならず、形式面でもより整理された内容を望みたい。（一部報告に、誤字等が散見される）

また、いろいろな活動を「やったこと」は分かるが、「やりっぱなし」の感が強い。例えば、ループリックを導入している科目が174クラスに上ると記されているが、それがどのように活用されているのか。課題としてはどのような報告が上がってきているのか。導入によって学生の学修行動と学修がどのように変化したのか。すべてのケースでなくても良いので、報告されても良いのではなかったか。

つまり、今年度以降は各取組の「検証・改善」が中心になることから、平成28年度の検証に基づく課題の抽出と、29年度への改善策の検討が必要である。その際、個別の取組間の関係を整理するためにも、内部評価の前に、テーマの責任者による各テーマの取組の総括（検証と次年度への課題のまとめ）が不可欠であろう。

最後に、貴学ではクリティカルシンキングを含めた「考動力」の育成を重点目標とされ、様々な取組が全学的に展開されていることは素晴らしいが、今後国を挙げての高大接続改革を通じて、高校までに「考動力」の基礎的な能力、貴学における「基礎能力」を一定程度獲得した高校生が入学してくると期待される。教育上の「高大接続」を見据えた、貴学版の「三位一体の高大接続改革」の推進を期待したい。

## 外部評価④ 隅田 浩司氏

大学教育再生加速プログラム  
 「21世紀を生き抜く考動人＜Lifelong Active Learner＞の育成」  
 2016（平成28）年度 外部評価報告書

外部評価委員  
 東京富士大学経営学部 学部長 教授  
 隅田 浩司 博士(法学)

## 1) 活動内容の個別評価

平成28年度から平成31年度までの期間は、実施・評価・検証・改善フェーズと位置づけられている。テーマⅠは、「交渉学・クリティカルシンキング科目、交渉学WSについて、コモンループリックを用いて検証し、改善する」として、交渉学科目の内容を踏まえた交渉学ワークショップを学生主体で企画するほか、交渉学科目及びクリティカルシンキング科目の新設、授業実施例に関する報告・ピアレビューを行う学習会（FDおよびSD）の開催、授業科目におけるクラスループリックの試験運用、そして学生スタッフ育成及びリーダーシップ養成に向けた効果測定指標作成が事業計画内容となっている。テーマⅡは、「コモンループリック活用を促進すると共に、指標及びシステムを検証・改善する等」として、学習コンシェルジュ研修プログラムの改善、GPA等との評価のすりあわせの検証などが設定され、さらに両テーマに共通するものとして、当プロジェクトが提唱する考動人育成教育プログラム展開、及び学習成果可視化に向けたアクティブ・ラーニング先進事例の視察などが計画されている。

この点、その実施内容を見るに、テーマⅠでは、合計10回の考動力及びリーダーシップ育成研修が開催されている。その内容もワークショップに限らず、他大学との交流及び協力企業との共同開催によるリーダーシップ養成研修さらに中学生に対する体験授業開催などきわめて多岐にわたる内容である。また、その内容の多様性もさることながら、学生が主体となって共に教え学ぶというプロジェクト本来の趣旨・目的に即した運営がなされており、きわめて充実した取り組みであると高く評価する。また、アクティブ・ラーニングと交渉学の関連性に関するFD、SD研修会の開催そして、授業科目におけるクラスループリックの試験運用など教育への具体的な反映に向けた各種の取り組みも実施計画に即したものと判断する。テーマⅡでは、学修コンシェルジュ研修プログラムの実施、クラスループリックの普及に向けた取り組みの他、学習成果に関するGPA等他の指標とのすりあわせにむけた積極的な取り組みが実施されており、実施計画に基づいて本プロジェクトが履行されているものと判断する。そして総合的な取り組みに関しても、国内調査さらに海外調査においてはウィーン大学などの視察を通じて、ポーロニャ・プロセスなど欧州における大学改革の現状と課題について調査が行われている。これは、グローバルな視座から本プロジェクトの方向性を検証する取り組みとして評価できる。

## 2) 総合評価

2016（平成28）年度における本プロジェクトの取り組みは、テーマⅠおよびテーマⅡそして両テーマ共通の取り組みすべてにおいて、本プロジェクトの趣旨、目的に適合した実施計画が立案され、また、実施計画に基づいた着実な活動、教育が行われているものと判断する。特に、テーマⅠでは、関西地域にとどまらず、広くその活動範囲を広げ、大学間の連携にも積極的に取り組むと共に、企業との連携を通じた活動が行われている。当該活動を通じて、本プロジェクトの取り組みが他大学にも波及することが期待されるのみならず、産学官連携を通じた「考動人」の具体的な教育プログラム、その育成指標の可視化に向けた意見交換が進むことが期待される。なお、今後、交渉学に関する取り組みに際し、その教育内容拡充に向けた最新の研究内容の教育への反映など、教育の質の担保に向けさらなる取り組みを期待したい。

## 次年度以降の展開に向けて

### 【テーマⅠに関する内部評価ならびに外部評価に対するコメント】

交渉学ワークショップを通して、本学の学生（特にリーダーシップ養成対象者）が、他大学の学生、中学生、社会人との交流を深めていることが評価されている。次年度以降も、引き続き、同種の取り組みを展開していく計画である。

今年度、交渉学ならびにクリティカル・シンキング等の授業において、クラスループリックを試行的に活用したが、そのことに関する省察や分析が成されていないとの指摘が複数の評価者からあった。今年度は試行的にループリックを運用する科目担当者を募ることに注力し、その結果、174クラスにおいて運用される展開になったが、これは当初の予想を上回るものであり、膨大なデータの全てに目を通した上で、ここよりループリックの活用方法や、その運用に関する課題などを抽出するまでには至らなかった。次年度以降、さらに運用クラスが増えることが予想されるが、膨大なデータを分析するための枠組みを早々に作り、そこより得られる情報、知の共有をはかり、以後の活用に資するように、データの解析をおこないたいと考えている。また、報告書の形態について、達成内容と課題を命じる必要のあることが指摘されたことについては、報告書作成に関するループリックを作成するなどして、建設的に対応したいと考えている。

### 【テーマⅡに関する内部評価ならびに外部評価に対するコメント】

入学時から卒後に至る学修行動調査・到達度調査等（入学時・パネル調査・卒後）、学修成果の可視化に関する取組みは、導入・拡大という観点において評価されている。またループリックの導入科目についても、その数の拡大において、一定の評価を受けた。

テーマⅡに関しては、多く学部との協働による活動が基盤であり、学修・学習成果を可視化したその結果を、教育・学習改善やFDに結びつけた事例があったが、残念ながらそれらを報告書に十分に記述することが出来なかった。川嶋外部評価委員からの指摘にあるように、活動の報告がナラティブ的なレベルに留まっていることは否めず、今後は報告様式の統一化やチェック表なども作成する必要があるだろう。また内容に関しても、活動の内容にとどまらず、このテーマⅡが学士課程教育および大学全体の内部質保証システムの評価として機能し始めていることを、事例を挙げて記述することが求められている。来年度は、この可視化の成果をもとに、教養教育の改革や新プログラムの開発など、質保証・向上の取り組みがさらに加速する年でもあることから、AP事業を通じて、本学の教育改革が加速したことを検証し、そのエビデンスを基盤としてさらに改善していくサイクルを構築していきたい。